

アイヌ口承文芸テキスト集 17

白沢ナベ口述 カムイユカラ

アテヤテンナ：六つ首の狐

採録・訳・註 中川裕

キーワード：アイヌ語、口承文芸、神話

このテキストは、千歳市蘭越出身の白沢ナベ氏（1905-93：戸籍上は 1906-）の語りによる kamuyyukar 「神謡」で、1987年12月4日に白沢氏の自宅において録音したものである。整理番号は N8712042KY。1988年8月31日に、不明部分の聞き直しを行っている。他の多くの話と同じように、兄であるイソキチ氏から聞いたものだということである。

あらすじ

私（オキクルミ）は一人で暮らしていたが、ある時退屈なので、山の手前のほうの狩場、奥のほうの狩場を見わたしていた。すると、六つの頭のついた狐が、私のところに遊びに来ようと考えているのが見えた。そこで私は囲炉裏の火を埋けると、栗男に頼んで囲炉裏の灰の中にひそんでもらい、太針男を床の上に刺しておいた。カニ男には水樽の中に隠れてもらい、白のカムイを土間のひさしの上に置いた。そして杵のカムイを家に立てかけて、自分は屋根の棟木の上で寝転がっていた。

日が暮れると、六つ首の狐が、ひとつの頭にユカラを謡わせ、ひとつの頭にシノッチャを歌わせ、ひとつの頭で拍子を取り、ひとつの頭にオイナを語らせながら、山を下りて来た。そして家の中に入ると、「たしかにさっきまで長者のカムイ（オキクルミのこと）がいたと思って来たんだが」と言いながら、囲炉裏の埋火をかき回すと、栗男がはじけて、熱い灰や燠とともに狐の目や鼻や口に飛び込んだ、「熱い熱い」と言いながら狐がひっくり返ると、太針男が尻を刺した。狐が水樽のところに走って行って手をつっこむと、中に潜んでいたカニ男が手をはさんだ。「痛い痛い」と言いながら外に飛び出ると、土間のひさしの上にいた白のカムイが落ちてきて、狐を地面に押さえつけた。

そこで私は屋根の上から飛び降り、立てかけてあった杵のカムイをとって、めちやくちやに叩いたが、いっこうに死ぬ気配がない。土と一緒にゴミと一緒に細かく刻んだが、刻まれた肉が両側から這いよって、元の形に戻ろうとする。そこで、囲炉裏から燃えさしといっしょに熱い灰をすくいとって、それを上からかけてさらに刻むと、やっとなかなくなると、完全に死んだようだ

った。そこで、だいぶ前に倒れて腐っている倒木のところへその肉片を持って行って、「以前から食べたいと言っていたものを、持ってきてあげたから食べなさい」と言って捧げた。

こうやって私は六つの頭と六つの尻尾のついた化け狐を退治したのである。

解説

構成について

このカムイユカラは一読してわかるように、「猿蟹合戦」である。しかも他のアイヌの伝承では、人格を持つものとしてはほとんど出てこない栗や針が登場するところからしても、和人の伝承が入ったとってよいと思われるのだが、一方で、退治する主体はカニではなくオキクルミであり、相手はサルではなく六つ首の狐ということで、その点では大きく異なる。

カムイユカラにおけるこの話の類話としては、久保寺（1977a）の、神謡4「蜘蛛の神の自叙」（平賀エテノア氏口述：以下「平賀」と略称）と神謡5「自叙神不明」（平目カレピア氏口述：以下「平目」と略称）、および萱野（1998）の「イワンレクドシペ 六つ首の化け物」（鍋沢ねぶき氏口述：以下「鍋沢」と略称）がある。どれも沙流地方の伝承だが、内容的には「平賀」と他のふたつはかなり異なる。なお、千葉大学編（2015）の 17-08 および 17-10 も萱野茂氏録音、鍋沢ねぶき氏口述のものだが、「鍋沢」と同じ話なのでこちらで代表させる。

「平賀」の叙述者は蜘蛛の女神、退治される相手は *nisositciw imakake ta* 「雲居の果て」に住む *poro nitnekamuy* 「大魔神」という、カムイユカラなどによく登場する魔物である。そして *poro nitnekamuy* を迎え撃つために女神が仕掛けたのは、蜘蛛の女神の座っていたところに *ane kem okkayo* 「細針男」、囲炉裏の火の中に *yam okkayo* 「栗男」、窓のところに *sisoya okkayo* 「スズメバチ男」、樽のところに *tokkoni okkayo* 「へび（特にマムシ）男」、部屋の入口の上に *iyutani okkayo* 「杵男」、土間の入り口の上に *nisu okkayo* 「臼男」という布陣である。

一方、「平目」の叙述者は不明だが、退治される相手は *iwan rekut us pe* 「六つ首の生えたもの」であり、対するのは、囲炉裏の真ん中に *yam okkayo*、炉縁の後ろに *ruwe kem okkayo* 「太針男」、水樽の中に *amuspe okkayo* 「カニ男」、家のひさしの上に *nisu okkayo*、土間の入り口の上に *iyutani okkayo* ということになっている。

「鍋沢」も叙述者不明で、退治される相手は「平目」と同じく *iwan rekut us pe*。対するのは、囲炉裏の中に *yam okkayo*、座敷の真ん中に *ruwe kem okkayo*、窓のところに *soya okkayo* 「ハチ男」、水樽の中に *amuspe okkayo*、戸の前に *iyutani okkayo*、家のひさしの上に *nisu okkayo*、ということになっている。

この登場人物を見る限りにおいては、「平目」が、本編に一番近い印象を受ける。

それらの間の大きな違いとしては、「平賀」の *poro notne kamuy* は頭がひとつなので、それぞれの頭が別々のジャンルの歌や語りを演じるなどというくだりが無いことが挙げられる。それに対して「平目」では、ひとつの喉には赤ん坊の泣き声をさせ、ひとつの喉には子守唄を歌わせ、ひとつの喉にはあはあ言わせ、ひとつの喉には危急の叫びを上げさせ、ひとつの喉には祈詞を上げさせ、ひとつの喉には弔いの泣き声を上げさせてやってくる。一方「鍋沢」では、ひとつの喉には赤ん坊の泣き声をさせ、ひとつの喉には話をさせ、ひとつの喉にはチャランケ「弁論」をさせ、ひとつの喉にはサケハウという歌を歌わせ、ひとつの喉には危急の叫びを上げさせ、ひとつの喉にはあはあ言わせてやってくる。それぞれの頭に別々の声を出させるという点では本編と共通しているが、中身はそれぞれ異なっている。

一方、この沙流地方の三編が本編と異なる点は、魔物が自分のところにやってこようとしているのを知るきっかけが、本編では退屈しのぎに山の狩場を見わたして、偶然発見するという点であるのに対し、他の三つは別のカムイが知らせに来てそれを知るという展開になっていることである。「平賀」のほうは、何者かはわからないがかなり神格の高いカムイが、*sinta*「神鷲」に乗って飛んできて知らせ、「平目」のほうは、嘴と足の赤い鳥が窓のところにやってきて、魔物の襲来を告げる。「鍋沢」でも *enumnoya* という鳥が知らせにくることになっている。この鳥を萱野（1998）ではあえて訳していないが、久保寺（1992）では「四十雀」（シジュウカラ）となっている。シジュウカラは嘴も足も赤くないので、「鍋沢」で描かれているのとは違う鳥のようである。

これらの特徴を表にすると次頁表1のようになる。

ここから言えることは、本編は「敵の来訪を知る手段」において、沙流川の伝承と異なっているが、敵が六つ首の魔物であるという点で「平目」および「鍋沢」の伝承と一致しており、味方としてどのようなものに助けを依頼するかという点も加えると、「平目」と最も近い関係にあるということになる。ただし、六つの首にどういうことを言わせるかに関しては、三者三様であり、これに関しては演者のパフォーマンスに委ねられている部分であった可能性もある。

また、魔物の最後については、沙流地方の三篇はとどめを刺すのが臼と杵の違いはあれど、待ち構えていた者たちの手によってあっさり殺されるのだが、白沢氏の本編はその後に、肉片をゴミと一緒に刻んでも寄り集まるので、熱い灰をかけ、さらに倒木に捧げるという、強力な魔物を退治する際に用いられる常套的な表現が用いられている。これは明らかにこの物語に固有のものではなく、後から加えられたものと考えてよいだろう。

表1：4編の対照表

	本編	「平賀」	「平目」	「鍋沢」
叙述者	オキクルミ	クモの女神	不明	不明
敵	六つ首の狐	雲居の魔神	六つ首の化け物	六つ首の化け物
敵の来訪を知る手段	自分で見つける	神格の高いカムイ	嘴と足の赤い鳥	エヌノヤ (シジュウカラ?)
六つの首に出させる声	ユカラ、シノツ チャ、拍子、オ イナ		赤ん坊の泣き声、子 守唄、息、危急の叫 び、祈詞、吊いの泣 き声	赤ん坊の泣き声、 話、チャランケ、 サケハウ、息
味方	栗、太針、カニ、 白、杵	栗、細針、スズメ バチ、ヘビ、白、 杵	栗、太針、カニ、白、 杵	栗、太針、カニ、 ハチ、白、杵
魔物の最後	オキクルミが灰 をかけ、ゴミと 一緒に刻んで、 倒木に捧げる	白男に押しつぶさ れて、魂が飛び去 る	杵男に腰を突かれ て死ぬ	白男に押しつぶ されて死ぬ

いずれにせよ、「猿蟹合戦」の前半部である食物をめぐる争いの部分はどの例にも見られず、和人からの伝承だとした場合、①後半部のみが伝わった、あるいは、②猿も柿も北海道には無いものであるため、前半部は理解が困難であったために別の要素に差し替えられた、ということが考えられるであろう。

サケへについて

この神謡のサケへ「折り返し句」は *ateyatenna* であり、基本的に各行の最初につく。同じ白沢氏の神謡である N8911171KY のサケへは *ateyateyatennatenna* であり、この *ateyatenna* という句を含むが、叙述者は火の女神である。沙流郡平取町の木村キミ氏から私が 1978 年 7 月 15 日に録音した K7807152KY という神謡のサケへは *apemerumeru koyankoyanmat ateyatenna* であり、これも叙述者は火の女神である。平良他(編)(2011)第1話、白糠の四宅ヤエ氏口述の「火の神の自叙」という神謡は、*apeyatenna apeyatenna* という、形のきわめて類似したサケへで語

られる。

このような例から見て、ateyatenna というサケへは基本的に火のカムイと結び付けられているものと考えられるのだが、本編の叙述者はオキクルミということになっている。一方沙流川の伝承ではすべて nope というサケへで語られており、叙述者は「平賀」ではクモの女神ということになっているが、後のふたつは不明である。

このような点から、サケへとともにこの話の叙述者の変化過程が問題になるのだが、現時点では推測するにはまだ材料が少ない。ただ、大塚一美氏が石狩郡雨竜出身の杉村キナラブック氏から録音した未公開資料の中に、ateyatenna というサケへを持つ神謡が 2 編あり、それぞれ火の女神とクモの女神が叙述者であるところが注目される。つまり、火の女神とクモの女神は、物語中で同じような役割を持つもの—例えば魔物と戦う存在—として機能している可能性があり、その点でオキクルミとも共通点を持つことから、叙述者の入れ替えが行われたという可能性も考えてよいのではないかと思われる。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール) は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_ (アンダーバー) を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、an w_a → an ma. h_i や y_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。… とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。<na>のように< >で示したのは、佐藤知己氏が「有音休止」と呼んでいるものであり、おもに発話の最後の音節を繰り返す形で、次の発話までの間をとる語用上の形式である。

また本テキストは基本的に韻文で語られており、韻文部分は、メロディ上のひと区切りを 1 行として表示してある。この 1 行のまとまりは、基本的に 5 音節ないし 4 音節で構成されるが、それより短いばあいも長い場合もある。長い場合には、少しメロディを引き延ばして、やや早口でその中に詰め込むことが多いが、それが表記上 2 行以上に及んだ場合は、2 行目以下は 1 字下げして示す。

註はページごとに脚註の形で示した。脚註等における N8808312FN のような記号は、私の採録した資料の整理番号である。N(白沢ナベ) 88 (1988 年) 08 (8 月) 31 (31 日に録音した) 2 (2 本目のテープに収録されている) ことを示す。FN はフィールドノートの意味で、録音全体を聞き起したものを指す。また KY は神謡 (kamuyyukar) のテキストであることを指す。

本文

ATEYATENNA	ramma kane	いつも
	katkor kane	かわらず
ATEYATENNA	yaykoan kur	ひとりもので
	ip a=ne ki wa	私はあつて
	an=an awa	暮らしていたが
ATEYATENNA	yaykomismu	ひとりで退屈
	a=ki ki kusu	したので
	sineantota	ある日のこと
ATEYATENNA	sanke iwor so	手前の狩場
	iwor so kurka	狩場の上を
	a=sikkuspare	眺めわたし
ATEYATENNA	kimun iwor so	山奥の狩場
	iwor so kurka	狩場の上を
	a=sikkuspare	見わたして
ATEYATENNA	inkar=an awa	みると
ATEYATENNA	<na> iwan sapa eus ¹ cironnup	六つの頭が生えた狐が
ATEYATENNA	onuman an y_ak	日が暮れたら
	i=kosinewe	私のもとを訪れ
	ki ki kuni	ようと
	ramu kor an ruwe	思っているのが
	a=nukar ki ki na	見えたのだ
ATEYATENNA	orowakayki	そこで
ATEYATENNA	sironuman	日が暮れた
	tanpe kusu	ので
ATEYATENNA	ape a=una ²	火を埋け
ATEYATENNA	<na> yamni ... yam okkayo	栗男に
	a=yaykonisuk ³	頼んで

¹ eus : e- 「～の頭」 us 「～<場所>につく」ということで、先端についているということ。

² ape a=una : una は「灰」という意味の名詞でもあるが、動詞として使われる時には、「～に灰をかける」という意味になる。より正確に言えば、火に灰をかぶせて埋火にし、燃え尽きないようにすることをいう。

ATEYATENNA	a=una ape	埋火の
	ape tum a=omare	火の中に入れた
ATEYATENNA	<na> kamuyasi san w_a	化け物が下りてきて
	ape poye yakun	火をかき回したら
	yam pus wa sikihi osma yakun	栗がはせて目に飛び込んだら
	あちいあちい sekor	熱い熱いと
	itak ki ki kor	言いながら
ATEYATENNA	homakociwe	ひっくり返る。
	ne wa ne yakne	そうしたら
ATEYATENNA	osoro kem otko kuni	お尻を針で刺すように
ATEYATENNA	ruwe kem okkayo	太い針男に
	a=yaykonisuk	頼んで
ATEYATENNA	<na> so a=eotke	床に刺して
	a=yokore na	仕掛けておいた。
ATEYATENNA	orowakayki	それから
ATEYATENNA	amuspe okkayo	カニ男に
ATEYATENNA	a=yaykonisuk	頼んで
ATEYATENNA	wakkaku ontaro	水樽に
	a=omare ki na	入れた。
ATEYATENNA	nitne kamuy	魔神が
	wakkaku ontaro or un	水樽のところに
	hoyupu yakun	走っていったら
ATEYATENNA	wakkaku ontaro or wa	水樽の中から
	tekehe a=kupapa ⁴ kuni	(私が) 手にかみつくように
ATEYATENNA	a=i=koytak ⁵ ki kor	(私は) 言われて
ATEYATENNA	amuspe okkayo	カニ男を

³ yaykonisuk: nisuk でも「～を頼む」という意味になるので、nisuk と yaykonisuk ではどう違うのか尋ねたところ、「ちょっとまてな方にまわったんだ」(N8808312FN) という答えだった。「まて」というのは丁寧という意味である。そこから、ここでは意味には影響なく、2 音節の nisuk を 4 音節に引き延ばすための韻文上の技法として yaykonisuk という形をとったのであり、「まて」というのはいわゆる雅語を言い表しているのだと解釈した。

⁴ kupapa: 「～にかみつく」という意味だが、カニの場合は当然はさみではさむことを指している。

⁵ tekehe a=kupapa kuni a=i=koytak: この部分はおそらく一時的に視点がカニ男のほうに移動しているのではないかと思われる。オキクルミの視点からの叙述であれば、tekehe kupapa kuni a=koytak 「(カニ男が魔神の) 手にかみつくように私が話した」でよいはずである。

	wakkaku ontaro or_ ta	水樽の中に
	a=yokore na	仕掛けた。
ATEYATENNA	orowakayki	それから
	nisu kamuy	臼のカムイを
ATEYATENNA	sentu ⁶ ka ta	土間の上に
ATEYATENNA	a=yokore na	仕掛けた。
ATEYATENNA	<na> iyutani kamuy	杵のカムイを
ATEYATENNA	<na> cise a=ekopaste na	家に立てかけた。
ATEYATENNA	orowakayki	そして
ATEYATENNA	<na> etupok ⁷ ka ta	家の屋根の棟木の上に
ATEYATENNA	hotke=an w_a	私が寝て
	an=an awa	いたところ
ATEYATENNA	<na> sirkunne awa	夜になると
ATEYATENNA	iwan sapa eus wen kamuy	六つ首の悪神が
ATEYATENNA	ar sapaha	ひとつの頭に
	yukare na	ユカラを謡わせ
ATEYATENNA	ar sapaha	ひとつの頭に
	sinotcakire	シノッチャを歌わせ
ATEYATENNA	ar sapaha	ひとつの頭に
	repte ⁸ ki na	拍子をとらせ
ATEYATENNA	ar sapaha	ひとつの頭に
	oynare ⁹ na	オイナを語らせ
ATEYATENNA	sapa epitta	すべての頭に

⁶ sentu : このように発音しているのであるが、確認すると sem etu のことであるという。sem は家の入口の土間の部分であり、そのひさしにあたることを etu 「鼻」というということである。

⁷ etupok : 屋根の棟木の先端部が少しせりだして、その下が rikunsuy 「天窓」になって開いている部分。

⁸ repte : 白沢氏に確認したところ、「repni 持って、こう（拍子をとる）やらせながら来たっていう」（N8808312FN）ということなので、repni 「拍子棒」を打たせたという意味ということになるが、それだと頭の部分は関係ないので、それと同時に頭には hetce 「合の手」を言わせたということかもしれないが、あるいは rekte 「歌わせた」だったのが、repte にすり替わったのかもしれない。

⁹ oynare : 「オイナをさせる」ということであるが、このオイナはいわゆる「聖伝」と呼ばれている、アエオイナカムイを叙述者とした物語のことを指すらしい。しかし、白沢氏本人はこういう話の中にオイナという言葉が出てくることは知っているが、本物は聞いたことがないという。

ATEYATENNA	<na> sinotca hawe yukar hawe	シノッチャする声、ユカラする声を
	uopukte ¹⁰ kor	いっせいに上げさせながら
ATEYATENNA	san ki ki na	下りてきた。
ATEYATENNA	<na> ahun ki ki wa	家の中に入って
	ene itak h_i	こう言った。
ATEYATENNA	"nispa kamuy	「長者神が
	tane pakno an ruwe	今までいたのを
	a=nukar ki ki wa	見て
	a=kosinewe kusu ek=an awa	私は尋ねて来たのだが
ATEYATENNA	hunak un arpa	どこへ行って
ATEYATENNA	isam ruwe an?"	しまったのだろうか？」と
	itak ki ki kor	言いながら
ATEYATENNA	cuna ape ¹¹	埋火を
	poypapoypa	かき回した
ATEYATENNA	enuki awa	すると
ATEYATENNA	<na> yam okkayo	栗男が
	pus ki ki na	はじけた
ATEYATENNA	pas turano	消し炭とともに
	sesek una	熱い灰と
	turano patke	ともにはじけて
ATEYATENNA	sikihi ne yakka	目にも
	etuhu onnayke ne yakka	鼻の中にも
	paro onnayke ne yakka	口の中にも
	sesek una	熱い灰や
ATEYATENNA	usat turano	燠と一緒に
ATEYATENNA	osma kuni	飛び込んだ
	ne p ne kusu	ものだから
ATEYATENNA	あちいあちい	「熱い熱い」と

¹⁰ uopukte : 白沢氏の説明によると、uopuk は、ひとりの人が音頭をとり、それに続いて他の人たちがいっせいに声を上げるようなことだということであるが、久保寺 (1977b:45) によると、upopo 「座り歌」の歌い方のうち、ukouk 「輪唱」に加えて、ひとりが音頭を取り他のものがそれに続いて合唱する形式は iekay と呼ばれ、uopuk というのは斉唱を指すとされているので、ここの説明も、すべての頭がいっせいに声を上げるということを言わんとしていたのだと考える。

¹¹ cuna ape : cuna<ci- 「自ら」 una 「～を埋ける」ということで「埋けられた」。

	itak ki ki kor	言いながら
	homakociwe	後ろにひっくり返ると
ATEYATENNA	osoroho yoko ruwe kem okkayo	待ち伏せしていた針男がお尻を
	otke ki na	突き刺した。
ATEYATENNA	osoroho nuyanuya kor	お尻をなでながら
	wakkaku ontaro or un	水樽の方へ
	hoyupu ki na	走って行った
ATEYATENNA	wakkaku ontaro or	水樽の中に
	tekehe eotke	手を突っ込んだ。
	enuki awa	すると
ATEYATENNA	tekehe a=kupapa p ne kusu	手にかみつかれたので
ATEYATENNA	あちちあちち	「痛い痛い」と
	itak ki ki kor	言いながら
ATEYATENNA	soyoterke na	表に飛び出した。
ATEYATENNA	sentu ka wa	土間のひさしから
ATEYATENNA	nisu kamuy	白のカムイが
ATEYATENNA	hacir hine	落ちてきて
ATEYATENNA	a=sirkorari	地面に押さえつけられ
ATEYATENNA	hocikacika	ばたばたと
	hopayepaye	もがいた
ATEYATENNA	tapampe kusu ... <su>	そこで
	etupok ka wa	屋根の棟木の上から
	herasi terke=an	下に私は飛び降りて、
ATEYATENNA	iyutani okkayo	杵男を
ATEYATENNA	a=esikari wa	つかんで
	a=toykokikkik	叩きまくった。
ATEYATENNA	<na> ki p ne korka	ところが
	eanray ruwe	死に絶える様子は
	oararisam	まったく無い
ATEYATENNA	tapampe kusu	そこで
ATEYATENNA	<na> a=toykotata ¹²	土と一緒に刻み

¹² toykotata : toyko-は「激しく、ひどく」という意味も表す接辞だが、ここでは munko-tata 「ゴミ

	a=munkotata	ゴミと一緒に刻んだ
	ki p ne korka	のだが
	kamihi uhekota sinusinu na	肉が両側からにじり寄ってくる。
ATEYATENNA	tapan pe kusu	そこで
ATEYATENNA	sesek una	熱い灰を
	usat turano	燠と一緒に
	a=nise ki ki wa	すくって
	kasi a=ota na	上にぶちまけた。
ATEYATENNA	a=toykotata	土と一緒に刻み
	a=munkotata	ゴミと一緒に刻み
ATEYATENNA	ki ayne sesek una にかって ¹³	しているうちに、熱い灰にやられて
	kamihi uhekota sinusinu ka	肉が寄り集まることも
	somo ki wa oanray したと。	なくなって、完全に死んだと。
	それから	それから
	teeta wano	ずっと前から
	horak samamni	倒れている倒木
	munin samamni	腐った倒木の
	oro ta a=rura	ところへ運んで行って
ATEYATENNA	"teeta wano	「ずっと前から
	munin samamni	くさっている倒木が
	e rusuy kusu	食べたいので
	i=etanontaro ¹⁴	私に頼んでいた
	penune kusu	のだから

と一緒に刻む」と対句になっていることから、toy「土」ko-「～とともに」という意味だと解釈した。

¹³ sesek una にかって：「かって」というのは北海道方言で「～のせいで、～にやられて」のような意味を表す。これは、単に熱で焼いて動けなくしたということではなく、火の神の力を借りたということである。火の神の垢である灰は、熱くなくてもそれだけで魔物を動けなくし、追い払う力があることは、生きたまま死者の世界に入り込んでしまった人間が、死者から灰を撒かれて追い払われるという伝承が各地にあることからもうかがわれる。さらにそれに火の神のパワーである熱が加わるので、強力な力を発揮することになるわけである。

¹⁴ e rusuy kusu i=etanontaro：「食べたいので、私に頼んでいた」。samamni「倒木」というのは、aynu mosir「人間の世界」にやってきながら、人間の役に立つこともなく倒れて腐ってしまった木であり、kamuy mosir「カムイの世界」に戻ることもできず、人間に供物を捧げられることもなく、常に飢えている。それに肉を与えることによって、魂ごと取り押さえさせてしまうのである。

ATEYATENNA e yak pirka"
itak=an ki kor
a=samamnieymekkar

食べるがよい」と
言いながら
私は倒木にそれを捧げた

ATEYATENNA

(ここから語り口調)

ruwe ne kusu
arwen kamuy naanipakno sinewe kuni
a=nukar somo ki yak anakne,
earikinne an=an しるところ
sinewe p ne korka,
mismu=an w_a
kimun iwor so sanke iwor so
iwor so kurka a=sikkuspare ki akusu
iwan sapa eus iwan sar eus cironnup
i=kosinewe kuni ramu kor an ruwe
a=nukar おかげで <で>
a=rayke wa a=esamamnieymek wa
oarisam a ruwe ne kusu
a=eysoytak hawe ne na って
Okikurmi kamuy isoytak って
おわり

ので
悪神が遊びに来ようとしているのを
私が見なかったら
本当に私がいるところに
来たのだけれど
退屈なので
山奥の狩場、手前の狩場
狩場の上を見わたしたところ
六つの頭、六つの尻尾の生えた狐が
私のところを訪れようとしているのを
私が見たおかげで
殺して、倒木に捧げて
すっかりいなくなったので
その話をするのだと
オキクルミカムイが言ったって
終わり

参考文献

- 萱野茂（1998）『萱野茂のアイヌ神話集成』（ビクターエンターテインメント）
- 久保寺逸彦（1977a）『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』（岩波書店）
- 久保寺逸彦（1977b）『アイヌの文学』（岩波書店）
- 久保寺逸彦(1992)『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道教育委員会
- 平良智子・田村雅史他編(2011)『富永慶一採録 四宅ヤエの伝承 韻文編 1』（『四宅ヤエの伝承』刊行会）
- 千葉大学編（2015）『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書』

（なかがわ ひろし・千葉大学人文科学研究院）

Ainu Folklore Text-17
Nabe SHIRASAWA's *kamuyyukar*
The Six-headed Fox

NAKAGAWA Hiroshi

Summary:

This text was told by the late Ms. Nabe Shirasawa (1905-93, born in Chitose), on Dec. 4, 1987. The genre *kamuyyukar* “mythic epic” of the text is usually narrated with *sakehe* “a phrase for refrain” and this one’s *sakehe* is *ateyatenna*, which is usually used in the Fire Goddess’s tales, but the protagonist of this tale is Okikurmi, a human-shaped god.

This tale is an Ainu version of the story named as “The Crab and the Monkey”, a well-known folktale in Japan. Three variants of it were recorded in Saru region, two of which are coincided with this text in terms of that the foe is the six-headed monster.

Probably this Ainu version had come from Japanese tradition, but the first half of the Japanese version, i.e. the episode of quarrel for foods between the monkey and the crab, is omitted in the Ainu versions, and the monkey is replaced by a six-headed monster. Also this text has an ending episode that the monster was hard to die and Okikurmi minced its body, poured hot ash on it and gave the meat to fallen trees, then he could slay the monster completely. It is a formulaic motif seen in many Ainu folktales.

Outline of text:

I, Okikurmi lived alone. One day I was searching the mountains with my special power and found that the fox monster with six heads was coming to my home. Then I placed a chestnut-man in my hearth, a thick-needle-man on the mat, a crab-man in the water barrel, a mortar-man on the top of the front door and a mallet-man against a side of the house. I myself climbed up on the top of the house and lay on it.

In the evening the six-headed fox came down from the forest with his six heads narrating and singing different tales and songs. he entered my house finding no one there, and he poked the fire up, then the chestnut-man burst into his eyes. He fell over on the thick-needle-man, who stang his bottom. He rushed to the water barrel and was bitten by the crab-man. Running out from the door, he was crushed by the mortar-man. Then I descended from the top of the house, grabbed the mallet-man and pounded the monster with it, but it won’t die easily.

I minced up the monster’s body, but the minced meat was going to gather to rebuild himself. When I poured hot ash onto the pieces of the meat, they stopped to gather. Then I brought the meat to rotten fallen woods and had them eat it, so that the monster died completely.